

研究ノート

戦前の文学作品にみる近代中国・上海の企業人像

—茅盾「子夜」、横光利一「上海」、
アンドレ・マルロー「人間の条件」から—

小林 守

1. はじめに

清朝時代末期から中華民国初期において中国には多くの近代企業の設立が試みられた。

特に1840年のアヘン戦争において英国に軍事的に敗れて以降、国家の「富強」を企図し、軍事、経済、技術の分野で西欧の制度を導入しようと様々な施策を推進していった。近代産業・近代企業の設立と育成の最も早い事例としては清朝官僚による国営企業群がある。

1862年に当時の漢人官僚のトップに君臨していた李鴻章によって政府によるいわゆる官弁（官僚資本）の造幣局設立を皮切りに、1865年の江南造船所、1867年には江南製造局が設立された。また、外国資本を導入した上海織布局も李鴻章によって設立されている（1882年）。この後は官僚資本と外国資本、現地資本と外国資本が結びつきたいわゆる買弁資本、そして現地資本のみで設立された民族資本が次々と企業を起こした¹。官僚資本はやがて衰退するが、買弁資本および民族資本は第一次世界大戦直後の一時期に息を吹き返し、欧米そして日本企業と中国市場で伍する局面もあった。

実際に近代中国の民族資本家の代表格である張謇はこの19世紀末から20世紀初頭において多くの企業を設立し、外国資本の手から中国市場を取り戻そうとした。張謇は日清戦争後の中央官僚による改革運動変法自強運動が保守派の

反撃であるところの戊戌の変法で失敗すると、いよいよ中央政界主導の改革に見切りをつけ、地方に目を向けるようになる。例えば、日清戦争のあった1895年に既に当時の両広総督²、張之洞の委託を受けて、故郷の南通にて大生紗廠設立を計画し、これを契機に中央官僚の地位を捨てて、故郷に帰り、大生股文份有限公司（1899年設立の大生紗廠を改組：1907年）を設立している。その後、矢継ぎ早に通海墾牧公司、大同錢莊、淮海實業銀行、南通實業銀行、塩壠公司、広生油廠、大隆肥皂公司、上海大達外江輪歩公司、天生港輪歩公司、資生鉄冶廠、顧生酒廠、翰林印刷局等を設立する。こうした一連の企業を起こし、これらの地方経営者グループ（「大生資本家」）の指導者となった。企業経営者としての張謇は1914年ごろまでに30社の企業グループの総帥となった。日本の渋沢栄一に比較される人物である³。

しかし、第一次世界大戦が終結し、欧米企業が再び中国市場に復帰すると、競争に敗れていく。こうした競争の中で企業グループの旗艦企業である大生股文份有限公司が赤字に陥り、やがて塩壠会社が災害で大打撃を受けると、その後債務が累積し、銀行管理会社になって衰退した。

野沢（1972）は「日清戦争後（1895年）、日露戦争後（1905年）にわたる企業勃興が、愛国的動機にしろ、投機的性格は否定しえないも

のがあり、事態の本質的解決を見ないままに、利権回収（外国企業が中国において獲得している独占的営業権等－筆者注）、外貨排斥（外国製品の不買運動）といった運動が衰退していけば、当然の結果として恐慌が発生し、中国民族工業は苦境に陥ることになる」と民族企業の衰退を総括している⁴。

このように中国の民族企業を取り巻く経営環境は極めて厳しく、欧米および日本企業との競争に加えて、中国国内の国民党政府軍と軍閥の抗争で経済体制が混乱する過程で列強諸外国からの直接投資や各地に乱立する諸勢力が発行する債券などにより資金の流動性は高まるものの、その資金はリスクのある長期の産業投資ではなく、金融商品の取引による翹拔きを狙った短期の金融投資に流れていった。特にこうした経済の繁栄と混乱の主たる舞台となったのは1920年代～1930年代の上海であった。

2. 茅盾「子夜」における民族資本家

（1）民族資本家と工業経営の意義

中国の文豪、茅盾（1886－1981）はこの時代の中国民族資本の経営者とそれを取り巻く時代を長編「子夜」にてまざまざと描き切っている。茅盾の本名は沈德鴻、上海に隣接する浙江省の出身である。10歳の時に父を亡くし、母によって育てられ、湖州の小学校、嘉興の中学、北京大学に進み、予科3年を修了したのちに家計困難のため中退。上海の出版社、商務印書館に編集者として入り、その後小説を書き始めた。北京大学に進む前に辛亥革命がおり、その後、革命運動に参加し、作品を発表してゆく。革命をめぐる中国の人々の生きざまを描いた三部作「幻滅」、「動揺」、「追求」を発表した（「蝕」三部作）のち、一時期日本にわたり、帰国後の1932年に長編大作「子夜」を発表した⁵。この

小説の舞台は1930年の上海である。

この小説の主人公、民族資本家、呉荪甫は外国資本家に対抗して民族工業の振興をもくろむ野心的な資本家で、上海の閘北区に大きな製糸工場をもち、フランス租界の三階建ての洋館に住んでいる⁶。

1930年のある日、茅盾は「子夜」で主人公、呉荪甫に民族企業の中国にとっての意義を次のように語らせている。ナショナリズムにもとづく使命感と大実業家の息遣いを感じられるセリフである。

「いや！おれはやらなくちゃならん。中国の民族工業は指で数えられるほどしか残っちゃいないんだ。製糸業は中国民族の前途に重大な関係を持っているんだ。一国家が国家らしく、政府が政府らしくなりさえすれば、中国の工業はきっと有望なんだ。」⁷

このような民族資本家が確かに実在していたことは張謇の例を見ればわかる。近代中国の民族資本家の代表格である実在の人物、張謇も以下のように情熱をこめて、実業による中国全体の再生を志した。

「救国は目前の喫緊の課題である（中略）、これを樹に譬えれば、教育は花のようなものであり、陸海軍は果実のごとくである。しかし、根本は実業にある。もし、その花と果実の燦爛甘美であることに目を奪われて、その根本を忘れれば、花と果実が何によって生ずるかを知らないということである⁸」

（原文：「救国為目前之急。（中略）譬之樹然、教育猶花海陸軍猶果也。而其根本則在實業。若驚務其花與果燦爛甘美而忘其本、不知花與果將

何附而何自生。)」

工業（製造業）が国家を富強にする根源であり、安全保障（軍事）はそれによって成り立つと述べている。ところで、「子夜」において呉が製糸業をこのようにナショナリスティックな視点からも重視し、自らの企業群の中核と位置づけているのは清朝末期（1870年代～1890年代）に中国において綿紡績業が大いに発展していたからである。なお、このほかに鉱山業、製麵業、そのほか日用品（マッチ製造業等）も発展していた。しかも、綿布、綿紗、綿花などは依然として輸入にたよっており、中国国内の綿紡績業が発展すれば輸入品を抑制でき、国富の増加に寄与することができる状況であった（図表1）。

この小説の舞台である1930年にはすでに日本からの綿織物のための原材料（綿糸等）は輸入から中国製のものにかわりつつあった⁹。これを受けて欧米や日本の綿製品工場が中国に直接投資によって設立され、現地生産拠点として民族企業家と激しい競争を行っていた。呉は同じ中国人実業家のなかでも、そのような厳しい経営環境でも勝ち残っていけるようなパートナーを探す。以下のセリフを見てみる。

「我々が朱吟秋（主人公の資本家仲間－筆者注）たちをわれわれの会社に参加させたくないのは、彼らに実力がないためです。加入したところで名前だけの話で、会社の発展の助けになりません。しかし、彼らの企業だって中国人の企業に違いないから、いま彼らたちが立ち行かなければ、店を閉める以外に手はない。それでは中国工業の損失です。もしも彼らがその挙句に外国人に店を譲れば、中国における外国工業の勢力がそれだけ増すわけだし、中国工業にとっては一層不利になる。だから中国工業の将来のためには、我々はやっぱり彼らを『救済』する必要があります。およそこの『草案』に挙げてある『救済』するつもり企業は、みなこの主旨に従って決めたものです。¹⁰」

日系企業を含む外国企業の中国進出工場との競争に打ち勝つためには並大抵の覚悟では十分ではなく、経営の実力だけでなく、愛国心を伴う高い理想を持っていなければならない。そのような経営者として適格な者を選ぶのは慎重でなければならないということである。

また、呉と同志的紐帯を有するビジネス仲間、王和甫にも以下のように語る。

図表1：主要輸入品価格の総輸入額構成比（1871年～1911年）（％）

年 / 品目	鴉片	綿布・綿紗・ 綿花	染料・顔料	砂糖・穀物	鉄鋼	工具・機器	その他	合計
1871-1873	37.7	36.8	0.9	1.8	0.9	—	21.9	100
1881-1883	37.0	30.7	0.8	0.8	1.1	—	29.6	100
1891-1893	20.5	36.0	5.1	9.1	1.8	0.5	27.0	100
1901-1903	12.3	39.1	6.2	11.0	1.7	0.4	29.3	100
1909-1911	10.3	30.1	8.1	11.2	3.0	1.9	35.4	100
上記期間の 単純平均	23.6	34.5	4.2	6.8	1.7	0.9	28.6	100

注：輸入価格割合合計＝100％とする。

出所：嚴中平等編（1955）「中国近代経済史統計資料選」科学出版社、76ページ表18にもとづいて作成

「まさにその通りです。呉さんのお話はまことに救国の名言です。中国に実業が興ってから五、六十年になりますが、その間清朝時代の李鴻章、張之洞たちが興した官営の実業は計算に入れないとしても、民営のものだったたくさんありました。しかし、その成果はどこに残っているのでしょうか。経営が下手なために。欠損して停業し、結局大部分は外国商人の手にわたってしまったではありませんか¹¹。」

しかし、実力ある経営者が必ずしも愛国心をもっては限らなかった。工業よりもむしろ金融ビジネスを選好する傾向にあった。工業などの産業の育成よりも金融的な投機によっておのれの資産を増殖することに腐心していたのである。特に呉の事業拠点である国際都市、上海ではこのような傾向が強かった。これによって呉のような工業企業家は彼らとも対峙しなければならなくなる。

（2）工業経営者と投機的経営者－「対峙」と「妥協」－

このころ、近代中国において民族産業発展の障壁は外国資本や経営者の人材難ばかりではなく、資金調達の問題でもあった。先述のように国内の政治的・軍事的な混乱が拡大していくと、金融は産業投資を行わなくなり、一般の民族企業の成長を阻んでゆく。実業家仲間に「かれは呉蘓甫が金融界の圧迫を受けたことがなく、製糸業者が御難続きの現在でもなかなか景気のいいことを知っていた¹²」とみられていた主人公の民族資本家、呉蘓甫ですら資金の調達に苦しんでゆく。呉はやや自暴自棄になりかける。

「工業経営なんてくそくらえ。まったく手に負えん。なぜ初めから銀行をやらなかったんだろう。おれの資本と気力をもってすれば、銀行

経営だって人後に落ちることはなかったんだ。今を時めく上海銀行だって創立当時はわずか十万円だったんだが……¹³」

これに対して、呉の実業家仲間であり、汽船会社の経営者、孫吉人が対応策を提案する。

「みなさん、ご遠慮には及びません。私の元来の考えは、銀行を作って数種類の企業を専門に経営することなんです。一般の人は銀行を設立すると、預金を吸収して、土地や金塊や公債などの投機事業をやっている。企業界に対しては、担保貸付をするのがせいぜいです。われわれのこの銀行は、もし設立されれば、その大部分の資本で、数種類の最も有望な企業を経営すべきです。例えば揚子江以北の長距離バスとか、河南省の鋌山とかをです。¹⁴」

呉もこの孫の意見に全く賛同しているのであるが、現実にはさらに呉を追い込んでいく。つまり、現実には産業投資をする金融機関としてその経営者がますます減少するなかで、彼も次第に実業（紡績業）の工場労働者の賃金を削っても、利益を蓄積し、その資金で公債へ投機を仕掛けて一挙に差益を得て、事業資金難を解決しようとするのである。

それは同志的なつながりをもつ民族資本家仲間の王和甫や朱吟秋が次のような言葉がきっかけである。民族工業の育成により中国の産業を振興させようとする志の実現の優先順位をしばし落とし、まず、対峙する中国人金融事業者と同じように公債を介した投機事業で資金を増やそうとするのである。炭鋌の経営者、王和甫は以下のように妥協案を呉に提案する。

「我々の目的が結局そこにあるとしても、最初設立するときには、やはり柔軟な手段をとる

べきです。新しい企業ばかりやる銀行に投資させようというのは今の情勢ではまだ無理でしょう。最初はやはり普通銀行のやり方に従わなければなりませんまい¹⁵⁾

議論の末、この姿勢はますます顕著になり、この王は次第に工業経営をバックアップするための銀行設立という初期の目的から利殖のための銀行に関心を持ち始めるのである。例えば、経営不振に陥ったマッチ工場の経営者、周仲偉が融資を頼んできたときにはこう言って断る。

「われわれは最初企業銀行の下地をつくって、企業界のみなさんに融資をしたいと思います。ところが、その後、事、志とちがい、そちらの方面はいまでは非常に規模が小さくなりまして、おつきあいができかねる状況なんです。先月われわれは八つの工場を買収しましたが、いまのところ、戦争が終わらないために、揚子江方面へは売りさばきができず、上海では日本人の業者との競争があり、やむをえず範囲を縮小して半日操業に切り替えた次第です。そういうわけで、今日周さんをご相談においでになっても我々としては実際心余力不足でして、まことに申し訳ありません¹⁶⁾」(同上、253ページ)

製糸工場の経営者、朱吟秋も同様に投機の方に関心が向いてゆく。

「銀行を設立することは我々の自立救済の道ですが、実際は国家の経済、人民の生活に関係がありますから、政府としても拱手傍観してよいはずがないでしょう。先ほど唐さんは、政府の発行する公債はすべて実業振興に提供すべきである、とおっしゃったが—これはもちろん今日明日の問題とはなりません。ですが、ある一

つの実業を救済するために、特別公債を発行することなら、やってしかるべきことではないでしょうか¹⁷⁾

このように呉の仲間の民族工業経営者が現実の経営の厳しさに負け、志を曲げていく有様が「子夜」では、まざまざと描写されている。

(3) 民族資本家と上海金融界

「子夜」の舞台は上海であるが、さて当時の上海の金融界はどのような状況であったろうか。そもそも上海が外国の大資本である「多国籍企業」や買弁・民族資本の企業が集中し発展したのはこの都市の「良好な港湾機能」、「治安の良さ」、「多様な金融機能」の存在がある¹⁸⁾。

このうち、「港湾機能」は1940年のアヘン戦争の戦後処理として、英国は南京条約(1842年調印、1843年発効)により、広州をはじめとして自由貿易港を開港させたが、同条約第二条によって主要港における従来の外国人に対する規制を撤廃し、次のように自由貿易を約束させたためである¹⁹⁾。これが上海をもアジア随一の国際ビジネス都市にのし上げる契機となった。

「清国政府は広州において通商に従事せる英国商人をして専ら当該目的のために清国政府より免許を得たる「行」商人とのみ取引することを強制したりしが、清国皇帝は英国商人の居住すべき一切の港において、将来右の慣行を廃し、任意に何人とも通商取引に従事するを許すべきを約す・・・(攻略)」

上海はこの条約が発効した1843年からソフト面でもハード面でも極めて優位性を持つ都市になった。さらに列強諸国は行政権を上海の一定の地域に行使することができるようになった。「租界」の設置である。これが「治安の良さ」

もたらし、諸外国から駐在員や一発当てようとする本国からのビジネス浪人が上海に群がるようになる。

租界の始まりは英国租界である。1846年に最初に英国租界が設置され、1848年に拡張された。さらに「越えて1863年9月21日に蘇州河以北地区に自然に発生した米国租界と合併が実現し、共同租界が成立した」²⁰。その後、この共同租界は1899年にさらに拡張された。フランス租界は共同租界の南側に旧上海城内に接する形で単独で1849年に設置された。その後、1861年、1900年、1914年と拡張された。この租界の中を中心として、欧米系の銀行が多く設立され、上海には多様な金融機能が備わることになった。代表的な金融機関については銭荘と銀行がある。伝統的な金融機関は銭荘である。

殿木（1942）によると銭荘は18世紀後半の清代にすでにみられ、上海では1870年代の最盛期には上海で100以上あったという。最初は兌換のみを行っていたが、やがて預金、貸出、

荘票（一種の小切手－筆者注）にまで営業範囲を広げたという。やがて、日清戦争（1895年）以降は順次近代的銀行が設立されるに従って、銭荘を銀行に転換する動きが興っていった。殿木は「近代的銀行の発展に伴い、これら銭荘はあるいは銀行に転じ、あるいは人物的繋がりにおいて銀行と繋がりにおいて銀行と関係を持つことによって維持している」と述べている²¹。

こうした金融機関は清朝が辛亥革命（1911年）で倒れて、全国に支配権を及ぼそうとする国民政府軍、地方軍閥、共産党系の武装勢力そしてやがて租界を守ろうとする英国軍、日本軍の軍事的衝突や小競り合いが起これと、長期的な産業投資にはもはや関心を失い、ますます金融商品取引を通じた短期的な利殖に走っていったのである。茅盾は「子夜」では登場人物の一人に、このような上海の金融状況を次のように言わせている。

「戦争が起きると、奥地に匪賊が増えた。共産党赤軍の動きも倍加した。田舎の金持ちはみんな金をもって上海へ逃げてきた。現金が上海に集中して、政府はあとまだ何千万もの公債を発行することができるようになった。だが、金ができると戦争を起こす。戦争が起きると奥地の混乱はますますひどくなる。奥地が乱れると、金をもって上海に逃げてくる田舎の金持ちがふえる。政府はどしどし公債を発行することができるになる一つまり公債発行と戦争のいたちごっこだ。馮さん、もうわかったでしょう。ほかの商売は戦争が起きるとつぶれるが、公債稼業は例外なんだ。」²²

こうした状況にあって、国内の政治諸勢力、特に共産党系の勢力が軍事力を行使して、農村地域で勢力を広がるなか、資金は租界（共同租界、フランス租界）に守られた上海に集まり、

図表2：19世紀後半から20世紀初頭に上海に設立された主な銀行

銀行名	資本
中国通商銀行	中国系
東方銀行	英国系
有利銀行	英国系
麦加利銀行（渣打銀行）	英国系
滙豐銀行	英国系
法蘭西銀行	フランス系
徳華銀行	ドイツ系
横浜正金銀行	日系
戸部銀行（大清銀行）	中国系
信成銀行	中国系
浙江興業銀行	中国系
四明商業貯蓄	中国系
裕商銀行	－

出所：殿木圭一（1942）、何娟娟（2018）より筆者作成

公債への投資資金になっていくのである。ついに呉にも銀行を設立するが、その銀行の目的は「民族工業を支援する」ものではなく、「公債への投機で稼ぐ」ものに変質してしまっていた。製造業の振興を通じた中国の富強という当初の理想はいつのまにか脇においやられ、いままで批判していた投機的金融投資家と同じ志向を持ち始めたのである。銀行の共同経営者は呉にこのように言う。

「そうですとも。われわれの会社が金融機関である以上、『公債で鞘を稼ぐ』のも業務の一つです。²³」(同上、156ページ)

(4) 日本企業、英国企業との対峙

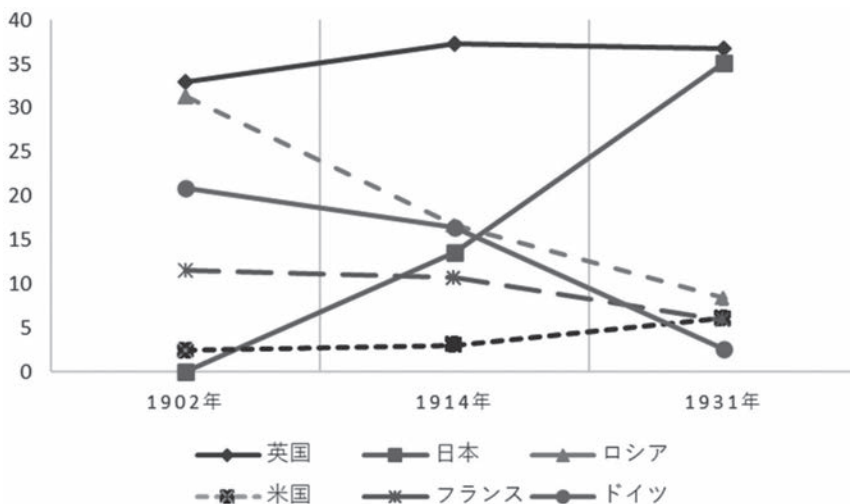
第一次世界大戦で欧州企業の中国市場における競争力が低下すると民族企業にもチャンスが生まれ、すでに述べたように張謇の江蘇省南通市にある企業群も発展した。同じように上海では紡績、製糸、たばこ、製粉、毛織物、メリヤス、ガラス、マッチなどの産業分野において発展がみられた²⁴。加えて、日本円の中国元に対

する為替レートの上昇と中国消費者の日本製品ボイコットが起こっていた。これによって中国市場における日本からの輸出品は競争力を失ったため、日本企業は日本からの輸出ではなく、中国への直接投資によって設立した中国工場（在華紡）による生産・販売に切り替えていく。図表3は1902年から1931年までの主要国の対中国直接投資の推移（全対中国直接投資に占める各国の投資額の割合（%）の推移）を示したものである。

1902年から1931年にかけて一貫して高い投資額の割合を占めているのは英国であるが、この間最も急速にその割合を増やしているのは日本である。このグラフ一つをもってしても中国における日本資本のプレゼンスの大きさがわかる。そしてそれは日本政府の中国への関心、もっと言えば「中国における国益」を守ろうとする意識につながっていったのであろう。

尾崎秀実（1939）は「例えば紡績についてみても支那資本の1億4000万元に対して日英資本は3億7000万元を占め、日英の勢力が圧倒的に強力である。しかも外国資本経営のものと支那

図表3 日欧米の対中直接投資の推移（1902年－1931年）



出所：尾崎秀実（1939）「現代支那論」岩波新書 p.125 の表より筆者作成

の民族資本経営のものを比較する場合、資本額のみならず技術の問題、政治的諸関係、経営の方法等について併せ考慮する場合は両者の実力には一層の隔たりを生ずるのである。」と述べている。「子夜」においても操業を続けるためには日本からの原料に頼らざるを得ない民族資本家、呉荪甫の経営者としての苦悩を次のようにつづっている。

「四、五か月前、機械糸まだ暴落していなかったころ、呉荪甫は千包も外国向けに売ったではないか。だから、製糸業者暫時の操業停止を考えている現在でも、呉荪甫は需要に応ずるために仕事を急いでいる。だが、荪甫にも苦しみはある。乾繭が足りないことだ。新繭はどうかといえ、いまは上簇の時期ではないので、繭の相場が上がっている。もちろん、日本の乾繭でも用は足りるが、日本為替が暴騰して以来、日本の乾繭の輸入が免税であるとはいえ、計算してみると安くはつかない――²⁵⁾」

日本企業は製品の競合でもあり、原料調達先でもあった。この2つの側面で日本企業は中国民族工業にとって大きな壁になってゆく。そして、やがてそのような状況を創出しているのが、中国国内の勢力争いによる分裂と日本の政治的・軍事的圧力であるとの認識を強めていく。結果として、呉ら民族資本家の目は政治に向いていき、それぞれがそれぞれの利害に合致する勢力との関係を作ろうとするのである。同じ民族資本家、唐雲山は中国の工業資本家が一致団結して政治に働きかけをすべきとして次のように情熱的に訴える。

「政治が軌道に乗れば発行された公債はすべて工業の振興に使われる。そうすれば、金融界と実業界との関係が緊密になる。いまのように

無関係になって、もうけ一点張りなんてことはなくなります。しかし、政治を軌道に乗せるためには、軍人を当てにすることはだめです。実業をやる人―工業資本家が、彼らの力を發揮して、政治を軌道に乗せなくてはならん²⁶⁾」

ただ、これに対する呉の考えはやや冷ややかである。かれは政治が安定し、欧米や日本企業との競争、そして金融的な苦境の脱出に資することにつながるとは考えているが、唐ほど単純に政治がかれのビジネスを助けてくれるとは考えていない。次のように、政治にかかわるリスクも冷徹に計算に入れているのである。

「せっかちな唐雲山が大小さまざまな企業家を仲間に入れて団体を組織し、それを政治的に利用しようとひたすら考えていること、また彼が企業界のやりくりの内幕については、実はずぶのしろうとであることをよく知っている。以前欧米を遍歴したこともある呉荪甫はもちろん『商売一点張り』の旧式な人物ではないが、結局のところ彼も企業家なのだ。彼は一方の目で政治をながめているが、もう一方の目は、いつも企業上の利害関係に向けられ、しかも疲れをしらず注視している²⁷⁾」

さらに呉の義兄の息子、若い杜学詩は資本家に対する社会主義的管理を強化してまでも、日本製品に対する中国製品の競争力を高めようという意見を持っている。中国の体制を作り変えてまでも日本企業を駆逐するという強い国家社会主義的なナショナリズムを吐露する。

「例えば、荪甫とその工場の女工です。いまは機械糸の売れ行きがわるいので、荪甫が女工にこう言ったとします。『われわれの機械糸はコストが高すぎて、日本生糸には太刀打ちでき

ない。われわれの製糸業は破産に瀕している。コストを下げるのは、賃金をへらさねばならん。民族の利益のために、諸君にしばらく辛抱してもらって、賃下げをさせてもらうほかない』だが、労働者たちはこう答える。『生活費が高くて、もともと腹いっぱい食えないでいるのに、この上賃下げをするのは、われわれに死ねというのと同じです。あなた方は金持ちで経営者なんだから、飢えはしないでしょう。民族全体の利益のために、あなた方にしばらく辛抱していただいて、もうけを少なくすることになっていたきたい』－考えてみると、どちらにも理屈があります。しかし、民族の利益と階級の利益は衝突します²⁸」

「中国の生糸が日本の生糸に太刀打ちできないとすれば『国家』を管理する鉄の腕は労働者の賃金を切り下げるとともに、資本家に最低の価格で販売することを強制すべきなんだ。絶対に欧米市場で日本生糸を圧倒すべきなんだ。もし資本家が原価を切って投げ売りすることを嫌がるなら、それならば『国家』は彼の工場を没収することだってできるんだ²⁹」

3. 横光利一「上海」における日系企業人

(1) 日系企業人にとっての上海

さて、上海の民族資本家に目の敵とされていた列強諸国の企業なかんづくその中でも脅威となっていた日本企業はどのように当時の小説に描かれていたのでしょうか。横光利一「上海」(1931年)にそれを見てみたい。神谷忠孝(1975)によると横光利一の「上海」は大正14年の5.30事件当時の上海を舞台にしている。ここでは日系の紡績会社、材木会社、銀行に勤務する日本人と当時東アジア随一の国際都市上海に住み着いた日本人の浮き草のような生活が列

強の植民地域である上海の租界を舞台に描かれている。唐亜明(2008)は資料として「日本僑民在上海」(上海辞書出版社)を引いて、当時の上海在住日本人の規模を以下のように紹介している³⁰。

「1925年、上海には19,510人の日本人が住んでいたが、横光が上海を訪れた1928年になると、26,541人に増え、イギリス人を超えて、上海にいる外国人では1位になった。そのころの調査によると、上海在住の日本人男性の55%は、中小企業や店、旅館などを経営し、40%は紡績工場や銀行や商社に勤めていた。官僚や大手企業の経営者は5%だった。そして、日中戦争中の1943年、上海在住の日本人は最高の103,968人に達した。」

登場人物のうち日本人は故国、日本には基盤を持たず、上海の日系銀行で働いている参木、上海の日系材木商社に勤める甲谷、その兄で東洋紡績上海工場の工人係である甲谷の兄、上海在住の建築士の山口である³¹。

彼らは労働者の運動にも同情を持ちながらも基本的にはニヒリストであり、状況に流されていく参木、人種間競争の議論好きな甲谷、反共産党・反労働運動の甲谷の兄等の人間像が描写されている。こうした日系企業とそれにかかわる人々が政治的な動乱のさなかに、上海という地域でその日その日の生き残りを図ろうとする混沌として状況が描かれている。こうした状況にある1930年の夏、川合(1953)、尾崎(1989)では、上海が次のように描写されている。

「上海は全く西洋の街であった。数十階のビルディング、その中で働く数百、数千の人たち、工場には煙突が林立し、そこで働く数千、数万の労働者の群れがあった。また街には洋風のレ

ストラン、シネマ館、キャバレー、ダンスホールが軒を連ね、夜はネオンの海であった。ここにはアメリカや、イギリスや、フランスのブルジョアジーがいた。本当にここは全く西洋であった。資本主義の街であった。そして今、その上海－帝国主義の牙城には、中国共産党が拳銃に火を吐かせながら肉迫していた。^{32]}

横光はそうしたあわただしい上海のビジネスの日常を次のように作品で描写している。

「商業中心地に入ると並列した銀行めがけて、為替仲買人の馬車の密集団が疾走していた。馬車は無数の礫を投げつけるような蹄の音を、かつかつと巻き上げつつ、層々と連なりながら、大路小路を駆けてきた。この馬車を動かす蒙古馬の速力は、刻々ニューヨークとロンドンの為替相場を動かしているのである。(中略)その上に乗っている仲買人たちは、ほとんど欧米人が占めていた。彼らは微笑と敏捷との武器をもって、銀行から銀行を駆け廻るのだ。彼らの株の差額は時々刻々、東洋と西洋の活動力の源泉となって伸縮する^{33]}」

「彼（甲谷）には、アメリカへ返すイギリスの戦債が、前からシンガポールの錫と護謨との間で呼吸していたのは分かっていた。だが、そのため、シンガポールの市場が恐慌し、材木が停止し―^{34]}

この上海は国際商品取引相場の中心であり、世界の動向が刻一刻とその相場に反映する街であった。ここでは欧米およびアジアの政治・軍事の刻一刻と変わる動向、一次産品の日々の取引動向がすべて上海という国際都市の心臓の鼓動、脈拍を決めているのである。欧米列強資本は中国市場において勢力を伸ばしていた日本企業の影響力を削ぐために自国政府に圧力をかけ、それが日本の政治・軍事を刺戟していた。

上海には世界各国からの物資輸入の中心港であり、外国系企業の上海駐在員、すなわち現地子会社の経営者には貿易、金融、紡績、日用品製造業に従事するものが多かった。「上海」の登場人物もそのような人たちである。横光は上海の状況を次のように登場人物の心象風景として表現している。

「ランカシャーでは英国棉の振興策を講じるため、工業家の大会が開催された。その結果、マンチェスターの工業家の集団は、ランカシャーと共同して、印度への外国棉府布の輸入に対し関税の引き上げを政府に向かって要求した。参木はこの英国におけるマーカンチリズムの活動が、何を意味するかを知っている。それは明らかに日本紡績への圧迫に違いない。彼らは支那への日本資本の発展が、着々として印度に於ける英国品－ランカシャーの製品のその随一の市場を襲っていることに、恐慌をきたしている。^{35]}

図表４：中国の輸入における各国の比率（％）

年	1913	1920	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937
日本	21	30	25	14	10	12	15	16	16
英国	17	16	8	11	11	22	11	12	12
米国	6	19	18	25	22	26	18	20	20
ドイツ	1	1	5	7	8	9	10	16	15

出所：尾崎秀実（1939）p.128

「海港からは拡大する罷業につれて急激に棉製品が減少した。対日為替が上がりだした。銀貨の価値が落ちると、金塊相場が暴騰した。欧米人の為替ブローカーの馬車の軍団は、一層その速力に鞭をあてて銀行間を駆け廻った。しかし、金塊の暴騰するに従って、海港には銀貨が充満し始めた。すると市場に於ける棉布の購買力が上がり出した。外品の払底が続き出した。紐育とリバプールと大阪の棉製品が暴騰した。³⁶」

金融相場のせわしない乱高下のように、共同租界やフランス租界等、治外法権的に列強諸国の警察組織が治安を管理する地域でも混乱は免れず、上海日本企業の日本人従業員にとって次のような恐怖を感じる日常生活であった。

「参木の常緑銀行ではその日の閉鎖時間が真近になると不穏な予言が蔓延した。どれはある盗賊団の一段が常緑銀行の自動車のマークを知っていて、取引銀行への銀行輸送の自動車を襲おうであろうという陰謀が、一人の行員の口から漏れ始めてことから発生した。³⁷」

（2）日系企業と労働運動

日系企業を取り巻くのは欧米列強資本の政治軍事を利用した圧力だけではない。いまや、日本資本を帝国主義的侵略の一環として敵視する自社工場の労働者からも労働運動の圧力が次のようにかかっていた。この労働運動には共産党幹部の指導を受けてますます組織的になり、武力をも伴った形で先鋭化していた。

「支那では、日本の紡績内にこの支那工人たちのマルキシズムの波が立ち上がっているのである。母国の資本は、今は挟み撃ちに逢いだしたのだ。³⁸」

このため、駐在する日本人社員の緊張は極限に達していた。

「参木はピストルの把手を握って工人たちを見回した。しかし、ふと、また彼は考えた。—もし母国が、この支那の工人を使わなければ、—彼に代わって使うものは、英国と米国に違いない。もし英国と米国が支那の工人をつかうなら、日本はやがて彼らのために使用されなければならないだろう。それなら、東洋はもうお終いだ。³⁹」

こうした追い詰められた日系紡績工場（在華紡）に中国の民族資本は嬉しさを隠さない。自らの工場においても労働運動が起こっているにもかかわらず、その労働運動が抗日運動と結びついて日本資本を追い出すことをどこかで願っている。中国民族資本家の銭石山は日本人妻を持っているが、日本へのシンパシーは微塵も感じておらず、次のように日本人にいう。それほど日本企業は怨嗟的になっていると横光は見ていたのであろう。

「ふむ、ふむ、しかしお国も中国の日貨排斥ではお困りのようですから、南洋へでも食い込まねば、猫の目見たいに内閣が変わるだけでございますな。ああ、そうそう、今日は日本紡が四つほど罷業で沈没しましたな。⁴⁰」

銭石山は茅盾の民族資本家、呉荪甫と同様、ナショナリズムにもとづく使命感をもつ民族資本家である。投機で利殖をする中国の金融資本家とは違う側面を持っている。中国の産業を中国人の資本家に取り戻そうと考えていることが以下の言葉でわかる。

「私たち中国人は、まず何より中国の産業を、

中国人の手で盛んにしなければなりませんわ。そうでなければお国でも中国でも、銀行は英国の支配からいつまでたっても脱けられませんからな。⁴¹⁾

民族資本家の中には在華紡を追いつ落とすために労働運動（総工会）を支援すらしたものもあったのであろう。横光は民族資本家、銭石山にその役割をさせている。

「この支那資本家の一団である総商会の一員に、お柳の主人の銭石山は混じっていた。彼は日本人紡績会社に罷業が起きるとかれらの一団と策動し始めた。彼らは支那人紡績に資金を増した。排日宣伝業者に費用を与えた。同時に罷業策源地である総工会に秋波を用いることさえ拒まなかった。⁴²⁾

上海の労働運動は非常に厳しい労働者の生活状況を背景に急速に先鋭化していた。1912年に中華民国工党が組織され、1916年には中華工農連合会が設立された。さらに1925年には上海において25余りの工会組織ができ、同年2月の日系紡績会社、内外綿株式会社の合理化に伴う労働争議をきっかけに労働運動は高揚し、5.30事件につながってゆく⁴³⁾。

内外綿株式会社で起こった待遇改善ストライキは青島の日系工場に飛び火し、これに対して日本海軍が出動したため、上海の労働運動を刺戟し、共同租界の治安を統治するインド人警官の発砲で共産党員、顧正紅が死亡した。これが学生運動に発展し、治安悪化をおそれた日本総領事館が逮捕を命じたが、釈放されない学生がいたため、沈静化しなかった。これに対して英国の治安当局の巡査が発砲し、13名が死亡する大事件にまで発展した。

列強列強資本の圧力のほか、こうした労働運動の高揚と激化によって日本資本は苦境に陥っていく。5.30事件の際は日系工場は一斉に工場のロックアウトの措置をとったため、これも労働者を刺激し、一層の運動の激化を招いた。こうした混乱と上海紡績界の権謀術数のありようを横光は以下のように書いている。

「罷業紡績会社の損失は、罷業時日と共に、ようやく増進し始めた。然も、操業停止の期間内に於ける賃金支払いの承諾を工人に与えない限り、なお依然として罷業は続けられるに違いないのだ。この罷業影響としての棉製品の欠乏から、最も巨利を占めたのは印度人の買占団と支那紡績の一団であった。支那人紡績は、前から久しく邦人会社に圧迫せられていたのである。彼らは邦人紡績に罷業が勃発すると同時に、休業していた会社さえ、全力を挙げて機械の運転を開始始めた。罷業職工内の熟練工が続々彼らの工場へ獲られだした。国貨の提唱が始まった。日貨の排斥が行われた。そうして支那人紡績会社の集団は今こそ支那に、初めて資本主義の勃興を企画しなければならない機会に遭遇したのだ。⁴⁴⁾

4. アンドレ・マルロー「人間の条件」にみる欧米企業人

しかし、苦境に陥っているのは日系企業だけではなかった。アンドレ・マルローは「人間の条件」でフランス企業の上海在住経営者、フェアルに以下のように語らせている。抗日運動、反英運動のなかで直接の標的にはなっていないものの、程度の差はあれ上海の外資系企業にも労働運動の影響は及んでいた。上海に共産党の支配下に入ればフランス租界も崩壊するのである。上海の企業界は不思議な活力を伴いつつも、

破滅の淵のぎりぎりに立たされていたのである。

「アメリカの銀行は中国の Kommunismus が勝利するのを恐れていた、Kommunismus が没落すれば、アメリカの銀行の政策も変わるだろう。フランス人として、フェラルは中国でいくつかの特権をほしいままにしていた。(中略) 彼にはこのまま持ちこたえるために政府に援助を乞う資格が十分あった。政府も新たな破綻を招くよりも、それを喜ぶだろう。⁴⁵⁾

図表3にみられるように英国を除いて欧米企業は上海への直接投資額において急速にプレゼンスを減じていった。この時期の上海のフランス系企業の苦境は前述のアンドレマルロー「人間の条件」で描写されているが、その他の企業はこのような上海におけるビジネス状況をどのようにみていたであろうか。横光の「上海」に登場するドイツ人フィゼル⁴⁶⁾はドイツの巨大多国籍企業 AEG (アーエーゲー) の上海駐在員である。「上海」で横光はこのフィゼルに上海の日系企業について次のように語らせている。

「今度の罷業は確かに(日系―筆者注)工場の方がいけませんよ。彼らは支那工人を軽蔑するからです。いったい軽蔑されて腹の立たんのは、昔から軽蔑する方なんですからね。第一日本人にとっても、外人を尊敬しないような人物を海外に送り出して、それでわれわれの販売力を独占しようとするところからして、損失の第一歩だ。これでは日本本国からの輸出品と、こちらの日本会社の製品とが衝突するだけじゃすみません。支那の工業会を刺戟して日本製品を培養していくに違いないんですからね。⁴⁷⁾

ただ、欧米企業同士もこの上海の混乱の中にそれぞれ相手の足を引っ張りあっている。米国

企業 G.E. の上海駐在員、クリーパーはフィゼルにこのように食って掛かる。

「あなたのおっしゃるように十分にドイツへは同情を感じますさ。しかしだね、だからといって、あなたの会社の AEG には同情しやしませんよ。あなたの会社のこの頃のシンジケートの発展は寧ろ憎むべき存在だよ」

「われわれのフェデラル無電は、今は日本の三井に放送権を奪われているのですぞ。(中略) ともかく、近來の AEG の進出ぶりのお盛んなことは、敵ながらあっぱれだと思いますよ。リンケ・ホフマン工場とは株式を交換し、ラウンハンマン会社との合同出資は勿論、ライン・メタル工場を併合した上、AEG リンケ・ホフマン・コンチェルン(コンチェルン―企業集団、複合企業、財閥: 筆者注)を造ったのは流石、ドイツ人だと感動させられているんですがね」

大企業関係者は公債や商品への投機のほか、このような企業買収に日々忙殺されていた。その一方で上海の一般庶民の生活は飛散であった。殿木(1942)は当時の状況を以下のように述べている。

「一方においては遊資の激増、それは1939年の夏には20～30億元と推定されたが1939年末頃には50～60億元と見積もられ、さらに1940年夏頃には70～80億元に達するといわれた。そして、その反面においては民衆の極度の貧困、共同租界の路地や空き地に発見され普善山荘によって合葬された餓死、凍死の死体数は1939年には22,381、1940年には19,993を数えている。⁴⁸⁾

アンドレ・マルロー「人間の条件」でも上海

に治安の悪化が以下のように表現されている。しかし、それでも内陸からはその上海に資金が集まってきていた。

「夕食の前後に、組合の首脳部、銀行家、河川運輸保険会社の社長、輸入業者、紡績界の巨頭などが訪ねてきた。みな、いくらかは、フェラルのグループはあるいは、政策のうでで仏亜財団と提携している外国のグループの一つに属している人たちだった。(中略) 中国の生ける心臓である上海は、それに生気を与えるものがそこを通過することによって、鼓動していた。どんな僻地からも一土地の所有者の大部分は銀行によって生きていた一血管が、ちょうど運河のように、中国の運営の鍵が握られているこの首都のほうへ流れ集まってきていた。銃声は続いていた。銃声は続いていた。今は、じっと待っていなければならなかった。⁴⁹⁾」

上海は破綻の前の「つかのまの光の輝き」を見せていたといってもよかった。しかし、その破綻はやがてゼネラルストライキの高揚、日本軍の侵攻などでこの最後の均衡は崩れるのである。

5. まとめに代えて

本稿では1930年前後の国際ビジネス都市上海において、祖国をこにす三人の作家が実業家をどのように見ていたかを比較し、経済的データだけでは語れない当時の「上海ビジネス」にかかわる企業人の実相をあぶりだすことを試みた。茅盾「子夜」の舞台は1930年5月から7月にかけての上海を、横光利一「上海」の舞台は1925年5月の上海を、そしてアンドレ・マルロー「人間の条件」は1927年4月の上海を舞台にしている。ここで取り上げた三人の作家

の作品はちょうど同じ時代の上海を舞台に選び、それぞれ異なる視点からほぼ同時期の上海とそれを取り巻く企業人の有様を描いている。

本稿ではそのうち、ビジネスにかかわっている登場人物がその当時の状況をどのようにとらえ、どのような行動をとろうとしたのかについて焦点をあてた。マクロ的な政治・軍事動向でもなく、個々の人間の思想や生きざまでもない、日々のビジネスにともなう行動である。いいかえれば、それぞれの状況に人間臭い企業人としてどうふるまったかをとらえようとしたものである。

「子夜」の呉は民族資本の成長が祖国の産業力を強め、いわゆる半植民地状態からの祖国の脱却につながるという理想から企業経営に尽力しているが、本国のバックアップを受けた外国企業との競争に加えて、同じ志をもってしかるべき中国人経営者の主流が産業投資ではなく、証券のカラ売りなどで短期的利殖を求める投機的行動に走る現実にいつのまにか理想を失ってゆく。すなわち、最後には自社工場の労働者の賃金を下げてまで、資金をねん出し、投機によってそうした主流に立ち向かっていくまでになってしまい、敗れ去ってゆく。

「上海」に登場する日系企業の日本人駐在員は甲谷、参木は母国日本では主流になれず、上海で一旗揚げようとする人間たちである。そこには企業活動を通じて何か価値あるものを成し遂げようとする理想はなく、生き馬の目を抜く上海のビジネス界につぶされまいとする抵抗力をエネルギーとしてその日その日を反射的に生きている。上海社会の悲惨を目にし、それを変革しようとする労働運動家と親交をむすんでも、どうにもできない無力感からただニヒルに受けとめて、特に深い理解を示そうとはしない。この状況で政治にかかわるのは商売に何のメリットももたらさないと考えている。かれらのビジ

ネス行動は、ただただ消耗的である。日々の仕事の障害になる労働運動に対しても反射的に対応することで精いっぱいである。

「人間の条件」のフランス人企業家、フェラルは欧州人としての優越感から上海のビジネスを見ている。この点は「上海」の甲谷、参木のビジネス行動に母国日本の弱点への自覚があることと大きな対比をなしている。進んだ国である母国のアジア支配は国策的に必然であり、みずからはそれに貢献しているという意識を持っている。したがって、経営に困難をもたらす騒乱があればそれを解決するための母国フランスの国家的バックアップや介入があって当然であるというものである。宗主国から「わざわざ」きてビジネスをやってあげているという傲慢と上海に対する上から目線がある。

それぞれの状況および企業人の行動は小説家の創作である。しかし、ここで取り上げた三人のビジネスマンの類型は事実としての当時の上海に実際に存在した様々な経営者の類型を登場人物として投影している。悲惨な不景気、労働運動の激化と戦争の危機の中でマネーだけは上海に集まり、列強を含めた大企業経営者や富裕層はその潤沢な資金の運用先を求めて、公債への投機や株式の購入を通じた企業買収に血眼になっている。投機や企業買収は権謀術数がともなう。地獄の沙汰も金次第という当時の中国や上海の同じ悲惨のなかで、三人の作家の目にはそれぞれの国の企業人が全く異なるものが見えていたと映ったのであろう。

参考文献

- 横光利一「上海」(1928) 改造、改造社、同(1956) 岩波文庫、岩波書店
アンドレ・マルロー (1933)「人間の条件」、小松清・新庄嘉章訳 (1971) 新潮文庫、新潮社
尾崎秀実「現代支那論」(1939) 岩波新書、岩波書店

- 殿本圭一「上海」(1942) 岩波新書、岩波書店
川合貞吉 (1953)「ある革命家の回想」日本出版共同
尾崎秀樹 (1989)「上海1930年」岩波新書、岩波書店
茅盾「子夜」(1954) 人民文学出版社
厳中平等編 (1955)「中国近代経済史統計資料選」科学出版社
茅盾「子夜(真夜中)」小野忍、高田昭二訳 (1962) 岩波文庫、岩波書店
野沢豊 (1972)「辛亥革命」岩波新書、岩波書店
大谷敏夫 (1972)「中国近代政治経済史」八千代出版
神谷忠孝 (1975)「横光利一上海」、村松・紅野・吉田編「近代日本文学における中国像」有斐閣選書所収、有斐閣
唐亜明 (2008)「横光利一の『上海』をよむ」、横光利一 (1956) 所収
尾崎秀樹「上海1930」(1989) 岩波新書、岩波書店
戸塚順子 (2009)「コラム企業の歴史的評価－内外綿株式会社資料の紹介」リエゾンニューズレター No.082 神戸大学経済経営研究所政策研究リエゾンセンター
吉澤誠一郎 (2010)「清朝と近代世界19世紀」岩波新書、岩波書店
川島真 (2010)「近代国家への模索1894-1925」岩波新書、岩波書店
石川禎浩 (2010)「革命とナショナリズム①925-1945」岩波新書、岩波書店
何娟娟 (2018)「清末上海における日本製紙幣の導入」東アジア文化交渉研究、関西大学
小林守 (2021)「中国近代の実業家にとっての地域経済振興の意義―張謇の『実業』、『教育』、『地方自治』―」(2021) 専修大学人文科学研究所周報、専修大学人文科学研究所

- ¹ 民族資本に買弁資本を含める論者も存在する。
- ² 中国の現在の広東省、広西壮族自治区を統括する清朝の役職
- ³ 小林守 (2021)
- ⁴ 野沢豊 (1972)「辛亥革命」岩波文庫p.55
- ⁵ 小野忍 (1972)「中国の現代文学」東京大学出

- 版会
茅盾著、小野忍訳（1961）「腐蝕（ある女の手記）」
解説、岩波文庫
- ⁶ 小野忍「中国の現代文学」東京大学出版会。
閘北区は上海市中心城区の北部、蘇州河の沿岸
に位置していたかつての地区名。
- ⁷ 「子夜」 p.77
- ⁸ 張怡祖編輯（1931）「張季子九録」『政聞録三』、
三十一葉。
- ⁹ 中国の労働コストの低廉さと日本円の対中国
元に対する交換レートの上昇により、日本から
中国への輸入品は価格競争力を失っていった。
- ¹⁰ 「子夜」 p. 151
- ¹¹ 同上
- ¹² 「子夜」 p.92
- ¹³ 同 p.77
- ¹⁴ 同 p.95
- ¹⁵ 「子夜」 p.96
- ¹⁶ 同 p.253
- ¹⁷ 同 p.93
- ¹⁸ 殿木圭一（1942） p.10
- ¹⁹ 同上
- ²⁰ 同上 p.p.27-28
- ²¹ 同上 p.138
- ²² 殿木（1942） p.262
- ²³ 殿木（1942）
- ²⁴ 川島真（2010） pp.174-175
- ²⁵ 「子夜」 p.92
- ²⁶ 同上 p.88
- ²⁷ 同上 p.148
- ²⁸ 同上 p.64
- ²⁹ 同上 p.67
- ³⁰ 唐亜明（2008）「横光利一の『上海』をよむ」
- ³¹ 神谷忠孝（1975） p.109
- ³² 川合貞吉（1953）「ある革命家の回想」日本
出版共同、尾崎秀樹（1989）「上海1930年」所
収
- ³³ 横光利一「上海」岩波文庫版 pp.51-52
- ³⁴ 同上 pp.53-54
- ³⁵ 同上 p.132
- ³⁶ 同上 p.206
- ³⁷ 同上 p.57
- ³⁸ 同上 p.132
- ³⁹ 同上 p.132
- ⁴⁰ 同上 p.163
- ⁴¹ 同上 p.165
- ⁴² 同上 p.207
- ⁴³ 殿木（1942） p.114 および戸塚（2009）
- ⁴⁴ 同上 p.207
- ⁴⁵ アンドレ・マルロー（1933）「人間の条件」、
小松清・新庄嘉章訳（1971）新潮文庫 p.274
- ⁴⁶ AEG（アーエーゲー）の上海駐在員。AEGは
ドイツのかつての総合電機メーカー。20世紀
に米国のGE、同じくドイツのシーメンスなどと
もにこの業界で世界に君臨した企業である。
- ⁴⁷ 同上 p.182
- ⁴⁸ 殿木（1942） p.162
- ⁴⁹ 「人間の条件」、p.147